

ら御冥福をお祈り致します。

## 榊牟礼登山の思い出

宮崎 千 ズ

(会員・佐伯市中村北町)

昭和五十一年の秋、「中央婦人学級の榊牟礼現地学習」で羽柴先生に御案内していたゞいた日のことが、懐かしく思い出されてまいります。

十三重の塔が集合場所、定時に、三十分も集合が遅れたにもかゝらず、先生はころよく、お待ちになり、遅れた方々のお気持ちをほぐされるなど、頭の下がる思いが致しました。

この日私は、初めて先生にお目にかゝったのです。いよいよ待望の榊牟礼登山です。晴天に恵まれた陽ざしは、山を登り始めると全身汗ばみ、足の運びも坂になるに従ってきつくなり、息も、ハアハアと大変でした。その時の先生の足どりは、とても軽快で、平然としたお姿は、さすが山を友として歩きつゞけて来られた賜だと感服させられました。

先生は途中説明しながら、注意も怠りなく、子供らは、

先生の後先にまっわりながら、元気に氣勢をあげています。紅く熟れた寒莓いんどを見つけて、この莓でのどをうるおすもよし、山の印をズボンにつけて帰えるもよし、と父にも似た懐かしい先生のお言葉をきゝ乍ら、やっと山頂にたどり着きました。

小学生の時、遠足で幾度か訪れた榊牟礼は、私の記憶と全く違った場所でした。遠くだった、と思っていた榊牟礼が、こんなにも身近かなところなのに——夢から醒めた私です。四十年の長い年月私の心の奥底に、眠り続けていた榊牟礼の里に、再会出来た嬉しき、懐かしきで、胸がいっぱいになりました。「榊山はこのあたりでは一番高い山で、山頂からの眺めも、よいですよ」と、登山好きな私に話された野村医師の言葉。此の日榊山を初めて眺め、知ったよろこび!!

蜜柑の小山を幾つもつくり、各所で福引きが始まり、小供らのよろこぶ声が、山頂をゆすり、楽しい爆笑がおこっています。野辺でのお弁当もおいしく、ほのぼのとした温かな、雰囲気、みんなひたっているとき、むかごの実を無心に摘み採る羽柴先生は、そよと吹く風の中で、和らいだ情緒をそえています。配られた歌詩を見な



むかごを摘む羽柴先生

## 羽柴弘氏を偲ぶ

片岡 博

(賛助会員・東京大田区)

羽柴弘氏追悼の原稿を十二月一杯に出せとあるのを誌上で拝見して、何とか私もひとことと思っていた。

ところで、私が『佐伯史談』を羽柴氏から送っていたところ、私が『佐伯史談』とは違って、当時は総てがしまつた今日の『佐伯史談』とは違って、当時は総てが羽柴氏の手になったものだった。あの几帳面な字で膨大な量のガリを切り、刷って綴じたものをいちいち送ることということは大変なことであり、誰にも真似の出来ることではなかった。だから、送っていただく度に感激しながら拝見したものである。

だが遠く離れている私は、その羽柴氏にお目にかかる機会は殆んど無かったのである。もっとも文通だけは相当地に頻繁で、いろいろのことをお話しし合っていた。

そういった中でいただいていたあるお便りと新聞の切り抜きとが見つからず、探がしているうちに年も変わってしまい、投稿をあきらめていたところ、それがひょ

がら、合唱する歌声は、空の青さに溶け込み、我を忘れさせます。

この日、はからずも先生のポーズを、先生の知らないうちに撮ったものがあります。自然を愛し、人を愛し、赤トンボを愛唱なさった先生のお気持ち、伝わって来るとき、私の胸にジーンと、こみあげて来るものがあります。赤トンボの歌、それは、私の愛唱歌でもあるのです。これからも、先生の赤トンボと共に、歌い続けたいと思います。先生の御冥福をお祈り致します。